

『現代民俗学の視点第2巻 民俗のことば』

根 岸 英 之

- 序章 ことばの民俗学は可能か 関一敏
 第二章 発話する身体—江戸落語「蒟蒻問答」における身ぶりと滑稽 益子待也・伊比恵子
 第一章 話型の認識—昔話研究の実践から 高木史人

本書は、へ現代民俗学の視点▽全三巻の「民俗の技術」「民俗のことば」「民俗の思想」の内の1冊である。本シリーズでは、「民俗とは人が自然に向かい合い、技術を駆使し、ことばを練り上げて思想へと高めていく「生きていく方法」であった」という認識の下、世界的な近代化と高度資本主義化の波の中、「いかに生きるのか」を考えるべき「方法としての民俗」を提示することを目指している(刊行のことばより)。

その民俗文化を構成するベースとして「技術」とは言つても、本巻が、もつとも「□承文芸」研究に関連した巻であることは違いない。そこで、本評では、「民俗のことば」といふことを例として

ただし、「そもそもこの講座は、民俗学のこれまでの体系をすべて網羅するという体裁をとっていない」(宮田登「民間学と民俗思想」〔現代民俗学の視点第3巻 民俗の思想〕所収)。よって、本巻が、ダイレクトに從来

本巻の内容は、次の論考から成る。

- 合 第十一章 民俗学史という方法—ロシアの場
 坂内徳明
- 第八章 「英靈」の発見 玉野井麻利子
 第九章 地方の創造—方言問題の生成 田中丸勝彦
 第十章 民俗調査と碑傳—伝承の一側面 長志珠絵
 従来の「□承文芸」研究を進展させるどのように可能性があるのかを考えつつ、内容の紹介をしていくことにしたい。

うに認識されて来たかを、主に柳田と関敬吾の著作を通じて解明していく。そして、「話の型」の認識は、普遍的な原理の存在と理論の体系化を補強してきたというより、研究主体の存在を隠蔽したところで、「読み書き」に縛られた見取り図が作られて来たものとする。

佐藤論文（第四章）

は、柳田がことばに注目したのは、言語文化を、対象としてだけではなく、文化の生産手段・生産様式として重視

する。その上で、隠語研究との微妙な距離感や方言論との関わりについて論じる。

現

新しい思考の様態に焦点を当てる戦略であつたとする。

して

いたからであり、新語論は、即ち人々の批評的文脈で用いられる「語彙研究」の再評価を目指した論文。

論文（序章）は、生活世界への感受性が、どのように「民俗学」として構築されていくのかを、民俗学胎動期の柳田の言説を通して明らかにしていく。そこには、方法論的にいくつかの限界はあるものの、「索引」としてのことばから実践のなかのことばへと重心移動をはかること」で、現在の課題へと引き寄せることができるとする。

この「ことばを固定された記録として捉えるのではなく、生活者が日常的実践の中でどのように運用するか」という視点こそが、本書全体に共通した問題意識と思われる。

関自身の説く「しあわせの民俗誌」については、具体的な記述が不明瞭だが、初発の民俗調査の捉え方に、評者は益するところが多かった。

「I ことばの民俗」は、演じられることばのさまざまなジャンルから、五つが取り上げられる。

高木論文（第一章）は、昔話研究の初期（昭和初期）において、昔話を聞き出すための「道具立て」としての「話型」が、どのよ

うに認識されて来たかを、主に柳田と関敬吾の著作を通じて解明していく。そして、「話の型」の認識は、普遍的な原理の存在と理論の体系化を補強してきたというより、研究主体の存在を隠蔽したところで、「読み書き」に縛られた見取り図が作られて来たものとする。

高木の意図は、研究主体の政治性への自覚を促す点にあると言えようが、昔話研究史としても手堅くまとめられている。

益子・伊比論文（第二章）は、江戸落語「蒟蒻問答」を取り上げ、笑いを生む重要な要素となっている「身ぶり」の役割を分析しながら、話の魅力（滑稽味）を明らかにする。昔話「蒟蒻問答」やトルコの「ナスレッディン・ホジャ物語」との比較も興味深いが、「身ぶり」という非言語表現を取り上げることにより、「発話行為」や「非言語表現」を主題化する可能性を提示している点がいい。

鈴木論文（第三章）は、「民俗語彙」研究のそもそももの構想と、その批判点や再評価の視点を見た後、「仕合せ」という語彙を例に、予め「民俗語彙」という特定な語彙が存在するのではなく、「言葉」を中心 nucleus に据えて語彙

の研究する方法こそが民俗学としての語彙研究であるとする。とかく「民俗語彙主義」との関わりにおいて論じた論考を収める。

続く「II ことばと制度」は、ことばをよ容を浮上させていくという結論が、実践の場におけることばの記述として意味を持つどう。り大きなシステムや制度（農・女・兵・国）との関わりにおいて論じた論考を収める。

牛島論文（第六章）は、「ありのまま」に息づいていた固有のことばが、近代的「知」の制度によって吸い上げられその中で生まれ代わり、再び「野良」に降りていく実態を、「犁」という農機具を例に記述する試み。農具の呼称として「近代」「改良」などの語がどのように用いられるか、「販売指導員」の実演の力など、モノにまつわることばをめぐる新たな研究視野が導かれる。

玉野井論文（第七章）は、明治期の子守り

たちの用いた「猥亵」語がどのようなものであつたかの復元を試みることにより、「話しことば」を「書きことば」に変える限界と可能性について提示する。しかし、やや踏み込みの甘さも感じる。

田中丸論文（第八章）は、日露戦争などを通して、「英靈」という語にどのようなイメージが獲得されていくのかを丹念に跡付け、「英靈」としての美談が、人々の規範として利用されていく点などについて言及する。た

んにことばの問題としてだけではなく、ことばを通して、靈魂観やクニイワの関係などにも深く沈潜する視座を持った論考となつている。

長論文（第九章）は、明治期を中心とした

日本で、「方言」が「国語」という一国の言語的な統一の想定とその変種という力学の中でのようになつて開かれてきたか、またそれが「国語教育」の中で、どのように作用するのかを論じたもの。評者にとっては、視角を広げてくれる非常に刺激的な論文であった。

最後の「III 学問のことば」は、I II とはやや異なる角度から、民俗学に関わること

ばの問題を取り上げている。

高桑論文（第十章）は、現代の民俗学が閉塞状況に陥っているのは、場に立つてものを

考える思考を喪失し、結果（客体）としての民俗への考察に終始していることにあるとし、伝えたつた人々や生活環境といった伝承や

伝承主体に眼を向ける必要性を説く。また、しげさや身振りといった「体碑伝承」を考察することの重要性も指摘する。ことばに重点を置く口承文芸調査を捉え直す契機たり得よ

坂内論文（第十一章）は、ロシアにおける民衆（ナロード）がどのように発見されて来たかを追いかながら、学史の構築は、その学問の成立基盤と意義を不斷に問い合わせ直すための基

本書の論文の中には、「文芸」にウエイトの置かれた従来の「口承文芸研究」からは、が「國語教育」の中で、どのように作用するのかを論じたもの。評者にとっては、視角を広げてくれる非常に刺激的な論文であった。

承に重点を移した研究の観点からは、参考すべき発言が散見できる。本書が、今後の口承文芸研究の新たな方向性を展開する上で、意義あるものとなることを期待したい。

（朝倉書店、四八〇〇円+税
（ねぎし・ひでゆき／市川市中央図書館）